

〈2024年度修士論文〉

自治体が設置するサードプレイスの構成要因と可能性について ——京都府京田辺市南部まちづくりセンター（ミライロ）を事例として——

日下 英明

目 次

- I 研究背景・問題意識
- II 先行研究のレビュー
- III サードプレイスの概念
- IV ミライロについて
- V 仮説の設定
- VI 調査
- VII 分析及び分析結果
- VIII 考察

I 研究背景・問題意識

2022年5月に京都府京田辺市に「南部まちづくりセンター」（以下、ミライロとする）が開設され筆者は初代の所長であった。

しかしながら筆者は複数の他職との兼務であったため現場にいる時間は限られていたことや現地に正規職員が配置されていないことから、運営上の様々な判断については、現場にいる中間支援組織代表（J氏）や市民感覚に近い会計年度職員が、利用者である市民の意見を聞いた上で考えた意見を採用することが多かった。

この施設は、京田辺市南部地域の地域活動の拠点であるとともに、京田辺市の最初の「まちづくりセンター」として、市全域の市民によるまちづくり活動の促進を担っている。

小泉編（2016）は著書「コミュニティデザイン学」の中で、「地域で市民主体のまちづくりを進めていくには、すでに可視化され、かつ活用可能な状態にある地域資源（ヒト、モノ、カネ、情報）に加えて不足する資源を活用することが効果的である」とし、「その資源を直接、間接的に供給する主体として、まちづくりセンターが期待される。」としている。

このように「まちづくりセンター」の在り様には一定の研究があり、その施設が目指すものや目的に合わせた方針等を考え、机上において事前に検討を重ねることも可能であったが、この施設においてはそのような先行研究に基づいた計画の立案は行っていない。

しかしながら、このミライロは市内の類似他施設（北部住民センター・中部住民センター）に比べて面積が小さいことなどの諸条件の制約がある中、他には

ない独自の魅力を持った施設を目指すこととし、中間支援組織と協働で市民ニーズの聞き取り事業（ワークショップなど）を何度も行い、可能な限りそこで出された市民の意見を取り入れながら、地元の方々に愛される施設となるように設置・運営を進めてきた。

その結果、この施設は多くの子どもたちが連日のように訪れ非常に居心地よく過ごし、子育て世代が新たな活動を始め、高齢者を中心とする地域の方々の憩いの場となっており、その価値を多くの市民の方々が高く評価している。

そして、このような施設（場所）が他にももっとたくさんあるべきだ、との声も一定数存在する。

そこで、本研究では同施設に関わり合いの深い人たちに着目し、多くの市民を惹きつけるその魅力の構成要因を明らかにし、このような施設の更なる可能性を指し示すことを目指すものとする。

II 先行研究のレビュー

オルデンバーグ（1989＝2013：17）が提唱した「サードプレイス」という概念は、人の第一の居場所は家庭であり、第二の居場所は職場とした時に、第三の居場所となるインフォーマルな公共の場があり、そこは「とびきり居心地の良い場所」であり、その存在は我々にとって必要なものであるとしている。

そして、彼はその第三の居場所を「サードプレイス」と名付けた。

この概念は35年も前に発表されたものではあるが、パットナム（2000＝2006：118）が「孤独なボウリング」の中でアメリカ人の食事をする場所について、「評論家のレイ・オルデンバーグが「素晴らしく素敵な場所（グレート・グッド・プレイス）」と呼んだ一日中過ごすことのできるたまり場がだんだんと消滅しているということである。結果として、米国人はしばしば座って語り合うことよりも、さっと腹に詰め込み走り出す方をますます選びとっているのである。」として「サードプレイス」を減少しつつあるアメリカの重要な社会関係資本の中の一つとして取り上げることで警鐘を鳴らした。

また、小林・山田（2014）の「マイプレイス志向と交流志向が共存するサードプレイス形成モデルの研

表1 レイ・オルデンバーグによるサードプレイスの8つの特徴

	特徴のキーワード	具体的内容
1	中立性の領域で (ニュートラル・グラウンド)	・個人が自由に出入りでき、誰も接待役を引き受けずに済み、全員がくつろいで居心地よいと感じる。
2	人を平等にするもの (レヴェラー)	・誰でも受け入れる場所であり、敷居が低く、正式な会員資格や入場拒否の基準がない。 ・社会的身分差とは無縁な資質を重視する。 ・地域や身分にかかわらず、当人の人柄の魅力や雰囲気こそがものを言う。
3	会話が主な活動	・愉快で面白い会話 ・元気があって、束縛がなく、熱っぽい会話が繰り返される。 ・会話を抑制するものがない。
4	利用しやすさと便宜	・知り合いがそこに居ると確信して一人で出かけて行ける。 ・時間的と場所の両方において利用が容易 ・長時間開いている。 ・定期的にいつでも訪れられる
5	常連	・その場所に特色を与え、いつ訪れても誰かしら仲間がいることを確約してくれる。 ・その場所を熟知していて、にぎやかな雰囲気を作ってくれる。 ・再訪し続け、みんなに不快感を与えないようにするだけで常連になることができる。
6	目立たない存在	・物理的構造は総じて地味だ。 ・ほかの用途で造られた場所 ・わりあい古くからある場所 ・派手で明るい商業主義的な外観ではない。
7	その雰囲気には遊び心 のある	・遊び心に満ちている。 ・楽しくて帰りたくないからと、誰もが思いのほか長居をしてしまう。
8	もう一つの我が家	・人々を根づかせることもある。 ・私物化、所有権があるわけではない環境を所有、支配している気持ちになる。 ・個々が再生されたり元気を取り戻したりする。 ・気楽な感じ、存在の自由 ・ぬくもりがある。

(出典) オルデンバーグ 2013: 67-96より筆者抜粋・作成

究：石川県能美市の非常設型『ひよっこりカフェ』を事例として」は、若年層が地域社会に関心を持ち繋がるきっかけとなるサードプレイスの創出を目的として行われ、その結果として「利用者の地域関与を生み出すサードプレイス創出モデルを構築できた。」としている。

さらに、平野（2023：178）は、子どもと大人のサードプレイスの役割と人材に関する研究において、サードプレイスの概念に近いオーストラリアのプレイグループに焦点をあてた研究の結果、「これからの日本にはサードプレイスを「地域による地域のための居場所」ととらえ地域住民を巻き込み、それを実施運営する人材の専門性を問うことの必要性を感じている。」とした上で「地域のサードプレイス構築のための人材育成、そして誰もが自分の住居する地域において多様な人々とともに安心して生活し、住み継がれることを切望しているのではないだろうか。」と締めくくっており、「サードプレイス」がより良い地域社会づくりに貢献できるものであるとして、その可能性を高く評価している。

このように先行研究から、「サードプレイス」という概念は市民の憩いの場、地域交流を活性化させる場としての機能を有することが証明され、まちづくりにおいて市民参画意識の醸成に非常に有効な手段として認知されていることは誰もが認めるところである。

しかしながら、ミライロのように公設公営の施設において、公による安心感から小学校低学年の子どもでも気軽に一人で訪れることができ、さまざまな仕掛け（コミュニティカフェ、まちライブラリー、まちづくり協議会など）により、高齢者を含む大人から子どもまでもが存在する空間における“多世代交流”の中で生まれる事象の研究や、そこにおける子どもについて大人が活動する場合の客体として捉えるのではなく、子ども達を主体として捉え、彼らから真摯に話を聞く研究が見られないことなどについて先行研究の限界性があると考ええる。

Ⅲ サードプレイスの概念

1 伝統的なサードプレイス

オルデンバーグ（1989＝2013：162－322）の著書「サードプレイス」の中において、目次で例示した伝統的なサードプレイスは以下の5つである。

- ・ドイツ系アメリカ人のラガービール園
- ・アメリカのスモールタウンのメインストリート
- ・イギリスのパブ
- ・フランスのカフェ
- ・ヨーロッパの古典的なコーヒーハウス

さらに文中においては、教会や居酒屋などが紹介されている。

それらのサードプレイスの特徴を解説し、その特徴をまとめたものとして、8つの項目が挙げられているので、それを抜き出してまとめたものが前頁の表1である。

公共的、商業的を問わず様々な用途において、意識的にサードプレイスを作る場合においては、これらの特徴を必ずしも全てでは無いが、極力取り入れて計画を進めることが必要だと考えられている。

2 拡張するサードプレイス

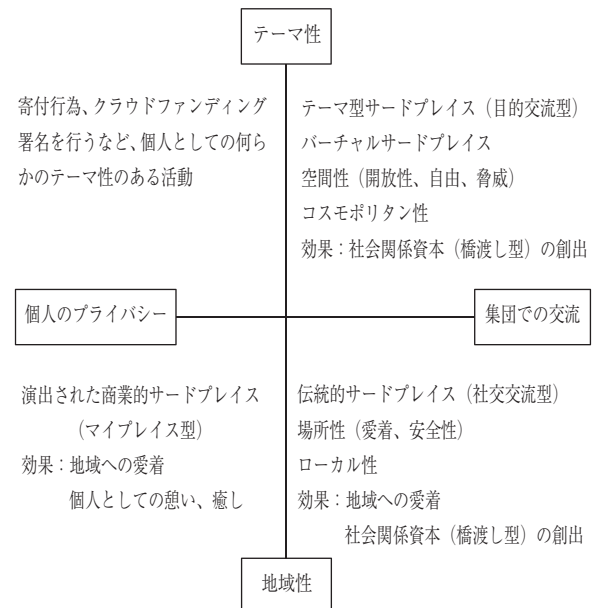
前述したようにパットナムが飲食店のような場面において、いわゆるファーストフード店のような「腹に詰め込む」食事ではなく、サードプレイスのような場所で「座って語り合う」食事の意義を訴えたことや、スターバックスコーヒーが自らの店舗をサードプレイスだと主張していることから分かるように、サードプレイスを商業的に利用する動きは活発に存在しており、その場合においても8つの特徴を取捨選択や強弱をつけながら活用している。

そこで、石山（2021）はサードプレイス概念の拡張の検討（サービス供給主体としてのサードプレイスの可能性と課題）において、以下の図1のようにサードプレイスの類型ごとの位置づけを行った。

その上で、石山（2021）は主に図1の右側の象限に限定して研究を行った。

石山（2021：11）がそのようにした理由は「サードプレイスという概念の中核はインフォーマルな公共生活にあり、その効果として社会関係資本の創出につながることは、拡張されたサードプレイスにおいても欠かさない要素であると考えられるからだ」としており、筆者においても、オルデンバーグ（2013）が非難する「都市計画家と住宅開発業者は、家庭と仕事から離れた生活があった昔の社会のたたずまいをひどく軽蔑してきた。近所の居酒屋を非難し、その郊外版を許さなかった」というような近代のまちづくりに疑問を感じており、公共的・商業的など、どのような形態であれ

図1 サードプレイスの類型



（出典） 石山（2021：11）より引用

「サードプレイス」を標榜する以上は、コミュニティの絆の重要性を意識したものであり、地域社会へ貢献すべき機能をもつべきだと考えたからである。

さらに石山（2021）は拡張されたサードプレイスとその特徴より次の4種類に分けた。

- ・伝統的サードプレイス
- ・演出された商業的サードプレイス
- ・バーチャルサードプレイス
- ・テーマ型サードプレイス

その上で、特徴による違いを明確にするため次の表2のような比較表を作成した。

この表によると、例えば伝統型サードプレイスは8つすべての特徴を高いレベルで満たし、常設性が前提であり、場所性が強い特徴を持っているといったように、特徴への強弱等でサードプレイスの仕分けができることを証明している。

3 地域コミュニティにおけるサードプレイス

サードプレイスに限らず公設公営、つまり行政が施策として実施する以上、明確に市民の幸福に資するものであることを説明する必要がある。

また地域における住民参加のまちづくりの推進はほぼすべての基礎自治体に取り組んでいる活動である。

引地、青木、大淵（2009）は地域に対する愛着の形成機構（物理的環境と社会的環境の影響）の研究において「地域への愛着を向上させることは、住民の協力行動を促すだけでなく、well-being も高める可能性を有する」とした上で、研究により得られた知見に基づいて考察した結果「イベントや小規模の住民参加プロジェクトなどが愛着を高める可能性が見出された」としている。

表2 サードプレイスの特徴に関する比較

サードプレイスの特徴	伝統的 サードプレイス	演出された商業的 サードプレイス	バーチャル サードプレイス	テーマ型 サードプレイス
中立の領域	強い	強い	強い	強い
人を平等にする	強い	強い	強い	強い
会話が主な活動	強い	弱い	強い	強い
利用しやすさと便宜	強い	中程度	強い	強い
常連	強い	弱い	中程度	中程度
目立たない存在	強い	弱い	中程度	中程度
遊び心がある	強い	強い	強い	強い
もうひとつのわが家	強い	強い	強い	強い
場所（ローカル）性	強い	中程度	弱い	中程度
空間（コスモポリタン）性	中程度	強い	強い	強い
常設性	強い	強い	中程度	中程度
事業性	中程度	強い	中程度	中程度
固有の特徴	場所性が強い結束型	個人の憩い、癒し、社会関係資本弱い、事業性強い	アクセス容易、階層・上下関係ない、場所性弱い、橋渡し型	空間性が強い橋渡し型

（出典）石山（2021：10）より引用

その視点で社会を見渡してみると、さまざまな形であまた存在するサードプレイスにおいて、その組織が目的とするところを目指し、住民参加型でさまざまなイベント等が数えきれないくらい展開されている。

そしてサードプレイスが行っている住民参加型のイベントなどの活動が、住民の地域への愛着を高め、時には住民の well-being を高めている可能性は高いと考える。

Ⅳ ミライロについて

1 開設前から開設後約2年間の主なできごとについて

(1) 京田辺市について

京田辺市は市勢要覧によると、人口はおよそ7万人、京都・大阪・奈良のほぼ中間点にあり、町の中心である近鉄新田辺駅を中心とした中部エリア、松井山手駅を中心に良好な住宅開発が進む北部エリア、関西文化学術都市の北端に位置し同志社大学などがある自然豊かな南部エリアの3地区に分かれる。

2019年に現市長上村崇氏が保守系候補に競り勝ち当選、同氏 HP（<http://www.kamimura.ne.jp>）によると浪人時代などに地方創生・まちづくり支援活動などに奔走しており、主要政策において市民協働を掲げ市民活動の支援・拠点の充実に取り組むとしている。

当時、京田辺市には北部住民センターと中部住民センターがあったが南部地域には住民センターはなかった、そこで南部地域に住民センターを設置することになった。

そして、北部、中部のセンターのように住民への貸館事業と文化教室の開催を中心とした従来型の住民センターではなく地域住民の拠点であるとともに市全体

の市民参画の促進に寄与する「まちづくりセンター」を設置することとなり、2022年5月に開設した。

京田辺市の2024年度の施政方針によると、交通利便性が高く緑豊かな自然に恵まれた田園都市として発展を続けている中、南部まちづくりセンター「ミライロ」の取り組みである「コミュニティカフェ等を通して人と人のつながりを育む」取り組みを他の地域でも試験的に実施することで、まちづくりに参画する人材の育成と交流の場づくりを全市的に展開することや、同志社大学をはじめとした大学との連携や都市間交流を推進し、人的・知的資源の交流と活用を図ることで、関係人口の拡大と地域課題の解決に向けた取り組みを進めていくとしている。

(2) ミライロ開設当初の状況

開設にあたり施設の禁忌事項（～するべからず集）の設置に関して筆者及び NPO 代表 J 氏、現地配属の会計年度職員で話し合いを行った。

「まずは利用者のモラルを信じ、禁忌事項を設けることなく運用を進めたい」とする筆者・J 氏に対し、「明文化された禁忌事項が無ければ市民を注意することができない。」との意見が会計年度職員からあった。

そこで（禁忌事項の）必要を感じる事例が起きれば筆者・J 氏が中心となり、利用者の市民と話し合うこととしたところ、結局禁忌事項が設置されることは今日までなかった。

これは大人による横暴が無い上に、子どもの危険な行動にはその場にいる市民の方が率先して注意してくれたことによる。

また、フリースペースに配置する家具類を、家具作りを行う NPO 法人の協力を得て市民参画の上で作成した。

本来であれば、安全を優先した家具等を行政が設置するケースが多いが、市民とともに作り上げた家具は皆に愛され、さらには木質感があり、非常に暖かい雰囲気を作り上げ、親しみやすいという良い意味で行政施設らしくないと言われている。

(3) 開設後まもなく（概ね3カ月頃まで）の状況

建物1階のほぼすべてをフリースペースとし、いつでもだれでも利用可能とし、その一角にオープンキッチンを設置し、コミュニティカフェを始めた。

カフェ実施に関する応募者が5組であったことから、各曜日（火曜日～土曜日/月曜は休館日）に振り分け、曜日毎に運営チームが変わるカフェの運用が始まった。

カフェに関するルールについては、運営にアドバイスをする立場の中間支援組織代表J氏とカフェ運営事業応募者とカフェ担当会計年度職員で会議を重ねて決め、その後も同会議によって修正しながら運営を続けている。

このように問題点があった場合の対応については、カフェに限らず市があらかじめ定めたルールによる解決を取らず、その都度J氏を中心に関係者が集まり解決方法を話し合うスタイルが確立されていった。

このカフェ応募者に子育て世代の女性が多くおり、友人などに来店を呼び掛けたことから子連れの主婦層の来場者が増えていくきっかけとなった。さらにママと子どもがいる雰囲気が小学生に居心地が良かったことから、小学生が学校帰りに立ち寄る姿が見受けられるようになった。

(4) 上記以降の状況

図書館の分館を設けるスペースが無いことから、一般社団法人まちライブラリーに参画し、ミライロのフリースペースの壁面の本棚を活用し、来場者が図書を楽しめるようにした。

まちライブラリーとは、磯井純充氏が提唱する「いつでも誰でもどこでも始めることができる「本」を通じて「人」と出会うまちの図書館を多様な人たちに展開する活動のこと」で、寄付された本でつくる図書館である。

通常の図書館と違い図書を棄損してもあまり問題になりにくいことから、乳児など小さい子ども連れの方には「気軽に利用できる。」と評判になっていった。

地域の拠点機能としては、京田辺市南部地域のミライロ所在エリアとその周辺の自治会等が「三山木地域まちづくり協議会」を組織し、ミライロ内に事務局を設置しミライロを中心に活動しており、高齢者を中心とした健康体操などの活動などが行われている。

2 特徴的な事象

ミライロでは常連を中心いくつかのチームが組織

されて様々な活動やイベントを開催している。その中から特徴的な活動を行っている団体を紹介する。

(1) チームでこぼこ

(紹介)

ミライロで活動する大人たちの姿を見て、自分たちも何かできないかと考えた小学生が中心となり、その小学生の兄弟である高校生も参加して団体を発足した。最初は、ミライロのイベントとして「お化け屋敷」を行った。

その後、地域の大人たちに呼び掛ける形でミライロ近隣のゴミ拾いイベントを開催した。現在3年目に入っているが、新たな小・中学生が加入しながら活動を続けている。

(特徴)

・子ども（小学生）が主体

子ども達が自主的に集まり、自らの意思でミライロにある市民活動関連の相談機能「まち・ことルーム」でアドバイザーのJ氏に相談し活動を始めた。

また、自分たちを支えてくれるパートナーとして、ミライロの常連である大学院生を仲間に加え、活動のレベルアップを図った。あくまで子どもが主体でありつつ周囲の大人を巻き込みながら活動を続けている。

・活動の質が高い

活動2年目には、一部のコアメンバーが中学生になり、新たな小学生が加入するなどがありながら活動を続け、市が主催する政策コンテストで優勝した。

このコンテストではチームでこぼこ以外は、大学生や大人のチームであった。

優勝した政策の内容は、子どもが進学時の環境の変化に戸惑わないように市内の誰でもが参加できる子ども運動会を行う内容であり、課題の設定もしっかりしており優勝にふさわしいものであった。

さらに優勝者の特典として市のバックアップの元でイベントを実施し、さらにもう一度とすでに2回実施しており参加者は毎回40～50名程度とのこと。

さらにイベント開催時には、ミライロで活動している同志社大学のボランティアサークルに自分たちから応援をお願いして協力してもらっている。

(2) 宿題やっつけ隊

(紹介)

ミライロ設置前に近隣幼稚園の保護者5名程度で、子どもの自習する場所が無いことに問題意識を感じて、何かできることはないかと考えたのがきっかけである。

その後、ミライロで週1回子どもたちの宿題をお手伝いするという活動を始めたところ30～40人の子どもたちの利用があり盛況に活動を行っている。

活動が具体化したことから、地域にこだわらず同じ志を持った人をメンバーに加えて組織強化を図ってい

る。

さらには、他地域でもこのような機能についての要望があることから、京田辺市北部地域で自宅を開放して活動するメンバーもいるなど活動のエリアが広がっている。

(特徴)

- ・自主性が高い

問題意識を持った当初は「行政に言って何とかしてもらおう。」と考えていたが、すぐには取り組みが行われなと感じ、自分たちで調査を行い過去の市議会の議事録に「子どもが自習できる場所が無いことへの問題意識はあるので、信頼できる NPO などがあればお願いしたい」というものを見つけた。

そして、まちづくりアドバイザーの J 氏に相談し、最終目標は行政に信頼され子どもの自習場所づくりと管理・運営を委託されることとし、まずは学校帰りにミライロにやって来る子ども達の宿題を手伝う活動を始めた。

- ・活動への高い意識が新たな問題を察知する

活動をしていく中で、子ども達が親しく話ができる大人を必要としていることや、その子ども達と我々大人が一定の関係性を築いてからでないと、子ども達は深刻な悩み事を話すことができないことなどを自分たちの活動の中から学び、自分たちの活動の重要性を再認識しながら、子ども達へのサポートのあり方について議論を重ねながら活動を続けている。

(3) グッジョブカフェ

(紹介)

大学生 5 人でコミュニティカフェに応募したことで活動を開始した。

カフェでは、ミライロの近くにある地元の農家が営む直売所「普賢寺ふれあいの駅」から売れ残りなどの野菜を無料で頂き、さらには「フードバンク京田辺」からお米等を頂き、それらを活用した低コストで野菜たっぷりのカレーなどを提供する。

価格設定は、一般大人 700 円、大学生 500 円、中高生 300 円、小学生以下は 100 円で、小学生以下はミニサイズとなる。

活動 2 年目を迎えて新メンバーを募集したところ、カフェを通して地域と繋がるボランティア活動ということで評判になり、メンバー 35 人となった。

団体名を G-LINK (ジーリンク) とし、地域でもその名が知れるようになり、自治会などが主催するマルシェや子ども関連のイベントなどに招待されることも多く、彼らも積極的に出店・参加している。

(特徴)

- ・活動内容が先進的

まずはフードロスへの貢献を目指して活動をデザインしたが、ミライロで子どもが集まっている姿を見て、

「子どもは 100 円で」をルールとして、価格などの設定を行い子ども食堂の機能も果たしている。

さらに 100 円クーポン制度を取り入れた。これは、大人が 100 円を寄付すると店から 100 円クーポン券がもらえる、そしてそのクーポン券は店の前の掲示板に寄付者のメッセージを付けて貼りだされる。メッセージは「おいしく食べてね」「財布忘れた人が使ってね」などである。小学生以下の子どもは、そのクーポン券を掲示板からはがしてお店に持っていきと無料でカレーを食べることができる。毎月 10~20 枚程度のクーポン券が使われている。

- ・大学生としてではなく社会人として

彼ら曰く「大学では大人といえ先生とかになってしまいうけれど、ミライロでは職員の人も周りの人も皆が大人・社会人として接してくれる気持ちを感じていて、最初のスタートの時から「学生を捨てて社会人として」やっていくことが団体としての決め事になっている、」とのことである。

3 特徴的な事象の分析

ミライロでは禁忌事項を設けず、子ども達の問題行動があった場合にはスタッフだけでなく、利用者の市民も注意を促すなどの行動を取ることやその後の対応を皆で話し合うことによって対応している。

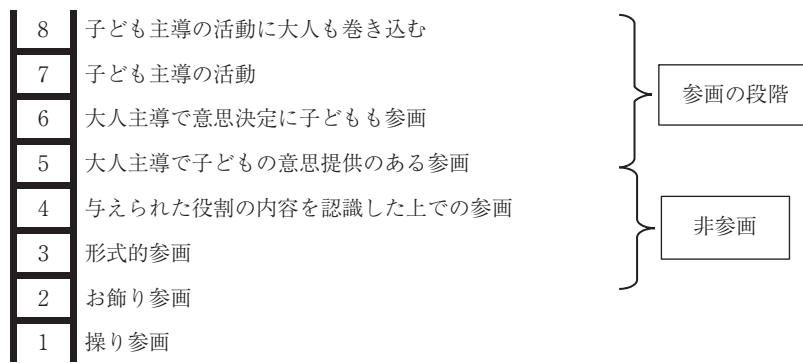
これは、柴野昌山 (2009) が著書「青少年・若者の自立支援 (ユースワークによる学校・地域の再生)」において、「居場所づくり支援という考え方に基づいた活動事例」として問題行動がある中学生に対してスタッフが様々な方法を駆使しながら粘り強く関係性を築いた事例の紹介の最後に「若者 (子ども) に関わる大人は、ある意味延々と続くテスト行為に耐えながら関係づくりをしていく必要があるのである」と述べているように、定められたルールにより他者を抑圧する方法ではなく、問題が起こった時をチャンスと捉えて、人と人との繋がりを作る機会とすることの大切さをミライロの関係者・利用者が理解し、受け入れていることの現れであると考えられる。

チームでこぼこの活動は、彼ら (子ども達) が活動を主導し、必要に応じて市のスタッフや J 氏に助けを求め、さらには大学生をはじめとする大人達がそこに巻き込まれている。

これは、ロジャー・ハート (1997=2000) が「子どもの参画 (コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際)」で提唱した図 2 「参画のはしご」における最上段に相当する事象であると考えられる。

グッジョブカフェが行う 100 円クーポン制度は、酒井・坪内 (2018) が「ボランティア活動における学習の再帰的循環、再帰的変容とその拡大の検討」で、こ

図2 ハートの参画のはしご



(出典) ロジャー・ハート (1997=2000):42より筆者抜粋・作成

のような活動を「ボランティア活動と類似する活動として、恩送りとペイ・フォワードがある。恩送りとは、誰からか受けた恩を、直接恩を受けた人ではなく別の人に贈る事である。恩を受けた人に直接恩を返す恩返しとは異なる。恩送りに近い意味として西洋にはペイ・フォワードという言葉がある。やはり、誰からか受けた思いやりを直接その人に返すのではなく、感謝しながら別の人に与えていくのである。」と紹介している。

グッジョブカフェのメンバーは自分たちがボランティア活動という恩送り・ペイ・フォワードを体現しながら、さらに周りの第三者的な立場であった人々に僅か100円の支出で恩送り・ペイ・フォワードに参加させる仕組みを築いたこととなる。

このような状況について酒井・坪内(2018)は「恩送りとペイ・フォワード活動が目指す感謝と物質の循環と同様に、ボランティア活動による学びは、自分だけの学びではなく、協働するすべての関係者が相互に鏡となって映し合い、自らと他者の学びが循環して、変容も循環、拡大していくのである。」としている。

まさにサービスを受給している立場だと思っていた人が100円を出すことによってサービスの供給側に回っている、という状況を生み出している。

V 仮説の設定

これまで紹介してきたミライロにおける様々な事象は、市民が主体的に活動を行った結果によるものであるが、ミライロにおいてのみ短時間で数多く生まれている。

その理由を検討し、このような事象が生まれる施設を今後も創り出していくために次の2つの仮説(リサーチ・クエスチョン; RQ)を設定する。

RQ. 1 サードプレイス論との適合性

ミライロはオルデンバーグが提唱した「サードプレイス」なのか、サードプレイスの特徴8項目を基に検

証する。

RQ. 2 ミライロの特徴を構成している要素

ミライロは子どもから高齢者までの多世代同居型の憩いの場であり、市民活動の活性化について特徴的な事象が起こっている。その理由を明らかにする。

VI 調査

1 調査対象

ミライロの常連で過去の経緯を知っていると思われる次の方々を調査対象としインタビューを実施する。

そしてIV章3節で述べたようなユースワークにおける青少年への正しい対応、子どもの参画としての最上位に位置する出来事や多くの関係者を巻き込みながら恩送り・ペイ・フォワードを推進するボランティア活動など、そのような活動が生まれる「場の作用」「人の関係性や相互作用」、そこにおけるまちづくりアドバイザーJ氏の役割について明らかにする。

2 調査方法

ミライロでの過ごし方、思い、感じていることなどを自由に発言する半構造型の定性的方法としてインタビューを一人当たり30分から1時間程度実施した。

きっかけが全く無い状態では、インタビューを受ける側も話にくいと考えて、次のとおり目安になるもの次の表4を活用したが、この表に沿って話す必要は無い旨を伝えてからインタビューを開始した。

また、筆者は相槌や話を広げるような発言をするものの、会話を誘導しないように気を付けることとした。

場所はミライロで行い、リラックスして話ができるよう、飲み物やお菓子などを用意した。また事前にはインタビューに関する詳細は説明せず、活動の空き時間に急をお願いする形で準備のない状態で本音を語ってもらえるよう努めた。

表3 インタビュー実施者一覧（実施場所：ミライロ会議室）

No.	仮名	性別	属性	活動等	実施日	所要時間
01	YN	女性	大学院生	コミュニティカフェ 子ども達主催の団体の補佐・相談役 (チームでこぼこ)	9月17日	30分
02	UH	女性	主婦	コミュニティカフェ 子ども達の勉強サポート団体代表 (宿題やつつけ隊)	9月17日	38分
03	SÝ	女性	主婦	コミュニティカフェ	11月9日	36分
04	NT	女性	主婦	子ども達の勉強サポート団体 (宿題やつつけ隊)	11月9日	34分
05	MH	男性	会計年度職員	まちづくり協議会担当	12月12日	38分
06	FS	男性	会計年度職員	まちライブラリー担当	9月30日	47分
07	UA	女性	会計年度職員	コミュニティカフェ担当	9月16日	31分
08	KS	男性	大学生	コミュニティカフェ	10月21日	24分
09	OS	女性	大学生	コミュニティカフェ	10月21日	21分
10	TK	女性	中学生	子ども達の団体創始者の1人 中核メンバー	11月8日	25分
11	NR	男性	小学生	子ども達の団体の中心メンバー	9月29日	32分

(出典) 筆者作成

表4 ヒアリングリスト用シート

ミライロについて	
・出会い	・今、あなたにとって
きっかけは	・これから
主な出会い、できごと	こうあって欲しい ここは直したい
思ったこと、気持ち	・そのほかなんでもどうぞ

(出典) 筆者作成

Ⅶ 分析及び分析結果

1 RQ. 1 サードプレイス論との適合性の分析

サードプレイスの8つの特徴である図1を基準に、インタビュー時の主な発言を項目毎に検証する。

(1) 中立性の領域で（ニュートラル・グラウンド）

11人中7人が該当することを述べていて主な意見は次のとおりである。

- ・ミライロに行ったら居心地いいからここでゲームしようよみたいな、(01)
- ・いろんな人が出入りしてくれていたから、いろんな要素があります。(02)
- ・職員と子供たち、市民の人との距離も近いかっていうのも何か来やすいのかなと思う。(07)

(2) 人を平等にするもの（レヴェラー）

11人中10人が該当することを述べていて主な意見は次のとおりである。

- ・大人の名前がバンバン出てくるし、小学生の名前がバンバン出てくること。(01)
- ・3回目ぐらいになったらなんかもう自分家みたいに、そう、緊張が解けて、そんな雰囲気(03)
- ・何でも言えるっていう雰囲気がいいですね。(06)
- ・みんな仲間とか知り合いみたいな感覚だし、上とか下とかない感じというか上下じゃなくもう並列っていうふうに感じています。(07)
- ・ここへ来たら大学生とか大人とか、私は年下やけど、そういう人間と「わしゃわしゃ」する。ここでそういうことをしている時って楽しい。一人じゃないって感じる。(10)

(3) 会話が主な活動

11人中5人が該当することを述べていて主な意見は次のとおりである。

- ・何かこんなにたくさん同じ思いの人がいるんだってことも知れたりね、情報交換をしたり一緒に何かをやったり。(02)
- ・〇〇君とかは遊ばへん、話す。世間の話とか、何で

もいろいろ話す。政治の話はよくした気がする。ミライロ来たらいろんな話を面と向かって話すっていう。自分の考えとか意見とかを言い合う。(10)

・みんなで何だかんだしゃべって掃除しようって話になった。(11)

(4) 利用しやすさと便宜

11人中6人が該当することを述べていて主な意見は次のとおりである。

- ・来たい時に来て好きなときに帰れるっていう場所(02)
- ・ここはもう三山木小学校の子が歩いて来られる場所じゃないですか。(08)
- ・ほどよく静かで、ほどよく人がいて、冷暖房がしっかりして、空調もいいし、しかもWi-Fiもありますし、無料で(09)
- ・今度高校生になったらちょっと夜に勉強しに来る(11)

(5) 常連

11人中7人が該当することを述べていて主な意見は次のとおりである。

- ・顔見知りになったらみんなすんごいウェルカムの、そういう何か一気に
- ・友達が増える場所ではあるのかもしれないです。(01)
- ・サロンみたいな感じですね。(03)
- ・ここでは話しかけるっていうことがあって、スタバや他のレストランでやったら怒られるじゃないですか。なによりも割と自由度が高い。(04)
- ・ここに来る子どもたちは結構積極的な子が多いのかな、グイグイ来るからこっちからも親しみやすい。(08)
- ・結構常連に来てくれている子たちっていうのがいて、小学生とか、中学生、高校生っていう子たちっていうのはすごく新鮮だったかな(09)

(6) 目立たない存在

11人中4人が該当することを述べていて主な意見は次のとおりである。

- ・雰囲気が良いですねとか言っていたりしますが、「商売、商売」してないからかと思います。(03)
- ・外から見た感じと中の感じがなんか若干違うからびっくりした。大人しかおらへんのかと思ったら、子供とかもいっぱいいたから(11)
- ・もともと銀行の支店であったものをリフォームして活用している。(市)

(7) その雰囲気には遊び心のある

11人中4人が該当することを述べていて主な意見は次のとおりである。

- ・宿題が終わってボードゲームしたり、こっちの子たちは宿題したり、こっちの子たちは漫画読んでいたりって、みんなで鬼ごっこしたりとか、そういうことが何かその場では行われていて(02)
- ・全部何かルールを一つ一つ決めていくと硬い感じになるし、みんなが来やすい場所じゃなくなるのかなって私思うので。何かその都度みんなで考えて話し合っていけるっていうのが良さんやなっていうふうに思っている。(07)
- ・ポケモンカード大会みたいなのをやりました。(09)

(8) もう一つの我が家

11人中8人が該当することを述べていて主な意見は次のとおりである。

- ・家でも学校でもない、もう一つの大人と関われる場所(02)
- ・もう子供の城になってしまって(05)
- ・なんか親としては安心できる施設だと思いますね。(06)
- ・夏休みとか本当に毎日朝9時になったら来てくれる子もいたし、なんか親も安心してミライロだったら、行っておいでみたいな感じで言ってくれているみたい。(07)
- ・自分にとって、このミライロって何だろうって言われたら、すごくすでに家みたいな。居たら家とは違う居心地の良さがあるから。(11)

2 RQ. 1 サードプレイス論との適合性の分析結果

インタビューの発言を図1レイ・オルデンバーグによるサードプレイスの8つの特徴に沿って仕分けしたところ、各特徴についての言及がつぎのとおりとなった。

表5 サードプレイス8つの特徴に関する言及数

特徴	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
件数	7	10	5	6	7	4	4	8

(出典) 筆者作成

特に図1に関する意見を求めたわけでは無く、自由にミライロに関して発言を行ったにも関わらず全ての項目に複数の言及があること、さらには小学生から次のような発言もあった。

- ・ここはサードプレイス。学校とかでサードプレイスという言葉は教えてもらった。(11)

石山の研究の表2に当てはめて考えると、すべての項目を持たしていること及び常設性などの前述の8つの特徴以外にも当てはまることから、「ミライロは伝統的サードプレイスである。」であるとの結論になる。

さらに表5の②や⑧が強く、⑥⑦が弱いことは、石山の言うテーマ型サードプレイスの要件に近いものがある。

これは、ミライロにおいて様々な活動が日常的に行われていることから、多くの利用者が何らかの目的を持って訪れていることによると考えられる。

それを裏付ける発言として次のようなものがあった。

- ・ 子供たちの元気なそういうエネルギーあふれる、こんな活動をやりたいとか。(01)
- ・ 活動を活発化させたいっていう自分の活動に対して、何かここでやったら何か出会えるかもって期待する(01)
- ・ やりたいことを素直に言えて、それを応援してもらえとか、あかんことはあかんでいいんですけども、とにかくそういう言える雰囲気がある。(06)
- ・ ミライロ来たらいろんな話を面と向かって話すっていう。自分の考えとか意見とかを言い合って(10)

結論として、テーマ型サードプレイスの特徴を持ちながらも、ミライロは伝統的なサードプレイスである、と言えるものとする。

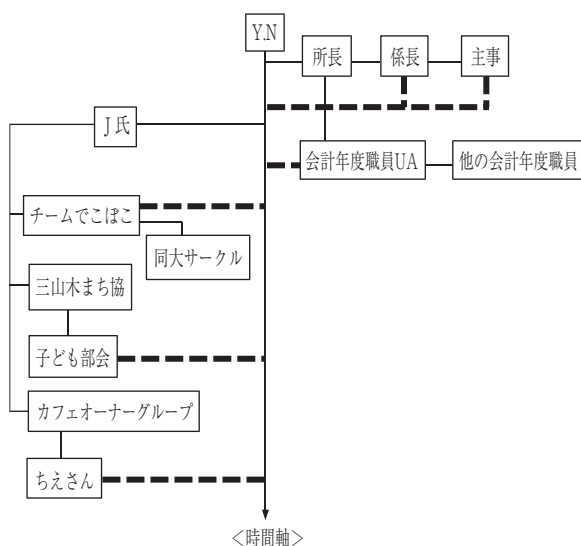
3 RQ. 2 ミライロの特徴を構成している要素の分析

インタビューよりミライロにおける様々な活動が活性化する背景として、人間関係の構築があるとの声が多い。そこでインタビューを受けていただいた方の人間関係がどのように変化していったかを明らかにするための人間関係相関図を「時間軸による変化」図と平面における「関係性の広がり」図を作成する。

この図の細い実線は最初に人間関係がつけられた経路であり、太い破線が最終的に自分で取捨選択し、その後継続している関係性を表している部分である。

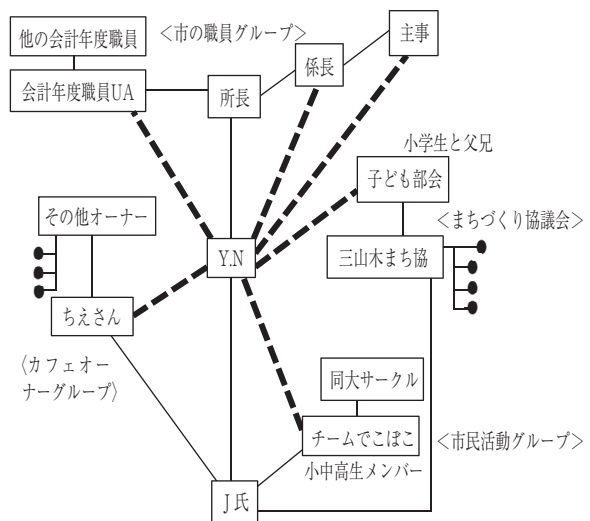
図3～図8ともに、ミライロに出入りするよう

図3 時間軸による変化 (No. 01の場合)



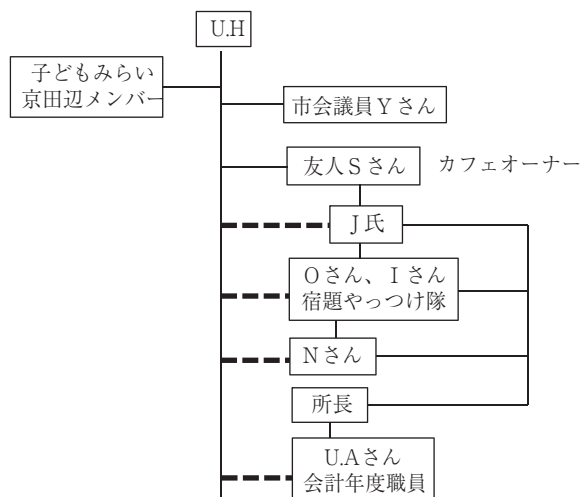
(出典) 筆者作成

図4 関係性の広がり (No. 01の場合)



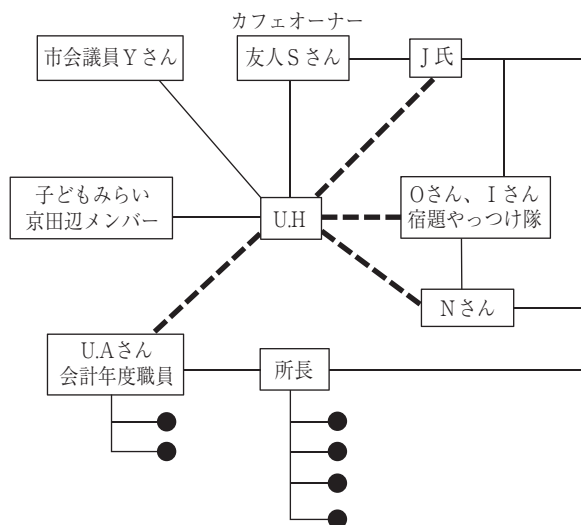
(出典) 筆者作成

図5 時間軸による変化 (No. 02の場合)



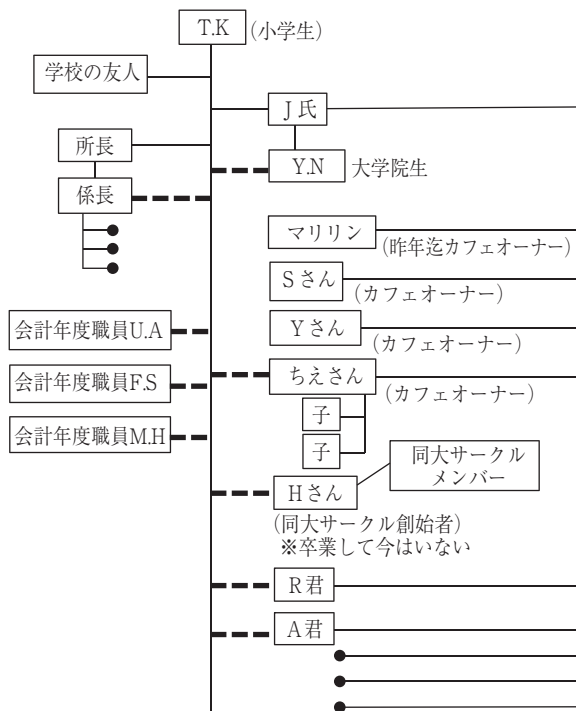
(出典) 筆者作成

図6 関係性の広がり (No. 02の場合)



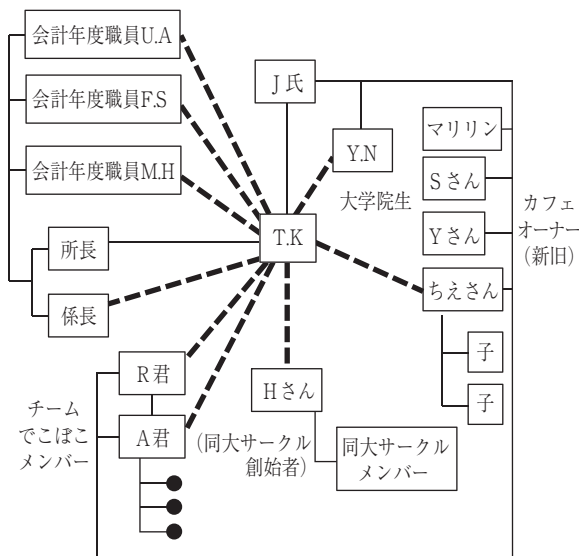
(出典) 筆者作成

図7 時間軸による変化 (No. 10の場合)



(出典) 筆者作成

図8 関係性の広がり (No. 10の場合)



(出典) 筆者作成

なった後に、ミライロで育まれた人間関係によって様々な活動を行っていることが読み取ることができる。

さらに各図を分析すると、どの図においてもJ氏が最初に人間関係を築いていく段階での入り口（ゲート）のような役割をしていることがわかる。

J氏は市民活動の専門家であり日頃から市民活動に関する相談窓口である「まち・ことルーム」を開設し、ミライロのほぼすべてを把握している立場であり、幅広い人的ネットワークを持っている。

ミライロに出入りするようになった人は、まずJ氏

と知り合うことで、彼が持つネットワークを共有することができるようになっている。

また、所長や会計年度職員といったスタッフも若干ではあるが同様の役割を担っている。

さらにインタビューにおいても次のような意見があった。

・ここ（ミライロ）はそういう部分ではいろんな人が出入りしてくれていたから、いろんな要素がありますよね。例えばカフェもいろんな曜日の人がいる、その分だけ人脈があるからやっぱり広がるじゃないですか（02）

・やりたいことを素直に言えて、それを応援してもらえとか、あかんことはあかんでいいんですけども、とにかくそういう言える雰囲気がある

・何でも言えるっていう雰囲気がいいですよ。（06）

4 RQ. 2 ミライロの特徴を構成している要素の分析結果

結果として、ミライロを訪れるようになれば、最初の段階として、主にJ氏を中心とした人的ネットワークを共有することができ、次の段階では、ミライロで「自分のしたい事」や「自分がどう過ごしたいか」など自分の基準でチョイスした人との関係性を大切にしていけることとなる。

まさに人間関係をゼロから再構築することができる。そして、その過程において、年齢や身分のようなものは全く関係ないことから、自然と交友関係が多世代化することとなる。

インタビューの中でミライロに出入りする前は「同世代との関係性に楽しさを見いだせない」や「学校での同級生との関係性に悩みがある」といった趣旨の発言もあったが、ミライロには、そのような問題を自然と解決していく前述のような機能があることが分かった。

このような状況は、柴山（2009：10）がいう「今日、ユースワークの基本的なスタンスは青少年がトラブルを抱えているとか、問題を起こしそうだから、という対策的発想をとるのではなく、アイデンティティ、意味、価値を追求する存在として青少年をとらえ、安全な場所（safe spaces、居場所）を提供することにおいて個人としての成長を支援する、という成長モデルに立脚する。」に沿ったものであり、子ども・青少年の健全な育成を望む地域の方々から、ミライロが高い評価を得ている本質であると考えられる。

Ⅷ 考察

1 J氏のインタビュー

ここまでの研究を踏まえて行ったミライロまちづくりアドバイザーのJ氏とのインタビューの結果を以下

にまとめる。

(12月20日実施、所要45分 於：ミライロ会議室)

(1) 雰囲気として「やったらええやん」がある。

- ・背中を押す仲間がたくさんいる。
- ・こんなのやりたいなって話になったら、ええやんという話になる。多くの大人たちは(今まで)そういう話をしたときにだいたい抵抗にあってきたんだと思う。

ミライロではJ氏は市民活動の専門家であり特別な立場にあるものの、それ以外の人たちは横並びで平等である。

その横並びの仲間がすでに自分のやりたい活動を行っており、活動を始めることについてポジティブな意見が背中を押してくれる環境がある。

(2) あいさつが大切

- ・要は入ってくる人に気楽にあいさつをして声をかけるっていう、これをだれかがすれば勝手に雰囲気がよくなるってこと。

全ての人がミライロに馴染む訳ではないが、できるだけその機会を多くの人に提供するためにスタッフだけでなく、子ども達をはじめとして誰もがあいさつを積極的に行うよう、(J氏が)マインドセットしてきた。

(3) 活動目的の明確化

- ・誰を幸せにするのかをはっきりさせてから(活動を)やりましょう。
- ・ターゲットをぎゅっと絞り込んで、とにかくこの人さえ笑顔になったらこの事業は成功したと言おうぜ。
- ・ここは多世代、いろんな世代の人がいるので、例えば子ども向けの活動がイメージし易かったり、もしくはちょっとやったら結果がビリッと返ってきたり、環境がいいんじゃないかと。

J氏より活動に際しては対象を明確にできるだけ絞り込むよう指導される。

そのことで、もし思わぬところからネガティブな反応があっても、対象としっかり向き合っていれば乗り越えられる。

また、ミライロが多世代交流の場であることから、活動を始める場としては対象を認識し易いメリットがある。

(4) 子どもはすごい

- ・子どもながら洗練されたこととか、そもそもいいことを言うので。
- ・社会にブレーキをかけさせられている気がします、そのロックを外してあげて、やったらええがなって言ってもらえたら。

子ども(大学生も)を信じて、やりたいことをさせ

てあげればうまくいく。私たち(大人)が思うより、はるかに彼らは素晴らしい感性を持っている。

(5) 市民をコントロールしようと思うのは間違い。

- ・ルールを決めたら簡単やけど、そのコントロールにあまり価値を感じない、その都度判断して、その判断が人によって違っていてもいいんじゃないか。

ミライロでは禁忌事項などのルールを極力少なくして、話し合いなどによって物事を決めていくスタイルが確立されている。

(6) 責任の所在なんて必要ない。

- ・社会というのは責任の所在をはっきりさせたいという意識が働く、だからすぐにサービスを提供している側の責任だと、受けている側には責任はない、みたいな話だけど、(ミライロでは)だれの責任だということを追及することをみんながやや放棄し始めていると思う。例えば自分が不満に思ったことがあったとしても、声を上げれば周りがふわふわとちょっとずつ埋めてくれる。

ミライロでは誰もが顔見知りのような雰囲気の中、誰かを手伝ったり、手伝われたりが複雑に絡み合う中、サービスの提供者と受注者の境界が不明確であり、大きな家族みたいな感覚がある。

先行研究では、供給主体とそのサービスを受ける客体が明確に区別されていることが多くあり、そのようなアプローチではミライロで起きている現象を研究することは不可能であると考える。

2 まとめ

ここまでミライロについて様々な角度から掘り下げてきたが、大きく2つの要素がこの施設を形作っている。一つ目は「伝統的サードプレイス」であり、その特徴や作り方はすでに確立されている。二つ目はミライロにおけるJ氏の役割である。

彼の役割についてはすでに述べたとおりであるが、その源となる素養とは何かを考えると、まずはいわゆる市民活動の実践者として一定期間、真摯に活動に取り組んできたことが挙げられる。さらには、中間支援組織的な役割として他者が行う市民活動をサポートしてきた経験があるということである。

つまり市民参画手法(市民活動などを行う様々な手法などに関する事柄)についての知識・実践経験・他者への発信力の3点を併せ持っている「市民参画マイスター」のような存在である。この一つ目と二つ目が合わさった時に、ミライロのような従来のサードプレイスの研究の枠を超えた「居場所づくり」が可能であると考えられる。当然のことながら、その地域の環境や「市民活動マイスター」の個性によって結果は大いに異なるものの、地域にとって素晴らしい結果をもたら

すことは変わらない。

しかしながら、一施設を取り上げた研究であり、この施設における研究もまだまだ掘り下げるべき余地があること、他施設を視野に入れていないことによる汎用性の無さなどの限界があることも事実である。

今後は筆者も時間をかけて「市民活動マイスター」となり、私が新たなミライロを作ることを目指したいと考えている。

最後に今回の研究での気づきについて説明することとする。複数の子ども達から「最近、話を聞いてくれる大人が少ない。」との声を聞いたので、ミライロ常連の大人達にそのあたりを感じているか質問してみたが、誰も心当たりはないとのことであった。再度、子ども達に話を聞くと、大人の人数はいるのだが、みんな忙しそうで話しかけにくい、とのことと分かった。

ミライロができて、最初の頃は、館の運営スタッフやカフェなどを運営する市民の方々も分からないことが多く、必要以上の人員を用意してしまっていた。

そのため、結果として「無駄な人員＝余分な人員」がいることとなっていた。しかし、それは子どもから見て暇そうな大人がいることでもあった。

我々大人が思うより子ども達は繊細に大人の事情を察する。よって仕事がある、又は忙しいなどの事情を抱えた大人には話しかけない。

彼らは、暇な大人を必要とし、探しているのである。

しかしながら、ミライロも3年目になり、関係者も洗練されて無駄なく運営できるようになってきた。さらに行政サイドも効率よく運営するよう検討を重ねている。そのことが結果として、子ども達のストレスにつながっている。

今後は、地域の高齢者や官学連携などの手法を活用し、一見余分に見えるような人員の配置を心がけてもらいたい。

それは無駄ではなく、まさに大人が子どもに示すべき「心の余裕」と言えるものであって、子ども達の健全な育成にとって必要なものだからである。

引用文献・参考文献

- 石山恒貴 (2021) 「サードプレイス概念の拡張の検討：サービス供給主体としてのサードプレイスの可能性」『日本労働研究雑誌』(732), 4-17頁。
- 片岡亜紀子・石山恒貴 (2017) 「地域コミュニティにおけるサードプレイスの役割と効果」『地域イノベーション』(9), 73-86頁。
- 久野和子 (2016) 「フィンランドにおける『第三の場(サードプレイス)』(third places)としての図書館」『神戸

- 女子大学文学部紀要』(49), 101-114頁。
- 小泉秀樹編 (2016) 『コミュニティデザイン学：その仕組みづくりから考える』東京大学出版会。
- 小林重人・山田広明 (2015) 「サードプレイスにおける経験がもたらす地域愛着と協力意向の形成」(6), 1-10頁。
- 小林重人・山田広明 (2014) 「マイプレイス志向と交流志向が共存するサードプレイス形成モデルの研究：石川県能美市の非常設型『ひよっこカフェ』を事例として」『地域活性研究』(5), 3-12頁。
- 酒井絵理香・坪内俊憲 (2018) 「ボランティア活動における学習の再帰的循環、再帰的変容とその拡大の検討」『共生科学』(9), 22-31頁。
- 柴野昌山 (2009) 『青少年・若者の自立支援：ユースワークによる学校・地域の再生』世界思想社。
- 高橋和佳・葉袋奈美子 (2023) 「雑司が谷研究15：コミュニティカフェの交流を生み出す配置計画」『日本女子大学紀要』(70), 95-103頁。
- 高野翔 (2022) 「ウェルビーイング自治体政策における居場所と舞台の場の概念の活用可能性の考察」『ふくい地域経済研究』(35), 11-26頁。
- 田中治彦 (2023) 「イギリスにおけるユースワークとシティズンシップ教育」『日本学習社会学会年報』(19), 36-40頁。
- 橋本成仁・今村陽子・海野遥香・堀裕典 (2022) 「サードプレイスと主観的幸福感に関する研究」『土木学会論文集D 3 (土木計画学)』77(5), 1_375-1_383頁。
- 引地博之・青木俊明・大淵憲一 (2009) 「地域に対する愛着の形成機構：物理的環境と社会的環境の影響」『土木学会論文集D』65(2), 101-110頁。
- 平野知見 (2023) 「子どもと大人のサードプレイスの役割と人材に関する研究」『京都文教大学こども教育学部研究紀要』(3), 163-182頁。
- 平塚真樹 (2019) 「若者と居場所をつくる：日欧のユースワークの現場から」『生涯発達研究』(11), 25-35頁。
- 持田良和 (2001) 「書評 ロジャー・ハート著『子どもの参画』」『子ども社会研究』(7), 109-110頁。
- 若林隆久 (2016) 「読書会による地域コミュニティの再生」『産業研究』52(1), 56-61頁。
- Oldenburg, R. (1989=2013), *The Great Good Place*, New York: Marlowe & Company (忠平美幸訳『サードプレイス』みすず書房)。
- Putnam, R. D. (2000=2006), *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, Simon & Schuster. (柴内康文訳『孤独なボウリング：米国コミュニティの崩壊と再生』, 柏書房)。
- Roger A. Hart (1997=2000), *CHILDRENS PARTICIPATION: The Theory and Practice of Involving Young Citizens in Community Development and Environmental Care* (木下勇・田中治彦・南博文監修, IPA 日本支部訳『子どもの参画：コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』, 萌文社)